
おれさまみあきさま！

皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれさまみあきさま！

【Nコード】

N6176G

【作者名】

皐月

【あらすじ】

美亜希が、『俺様』になった理由とは？
傷ついた美亜希の、
“しかえし”。

「転校生の、五十嵐美亜希いがらしみあきさんです。美亜希さん！入ってきてください」

先生が俺を紹介する声がする。
一応、入ってやるか。

ガラリと言う音。この音、嫌いなんだよな。

「俺の名前は五十嵐美亜希。性別は女。ちゃんと名前覚えてなかったら、ぶつ殺すから」

自己紹介、こんなものでいいだろ・・・？
そうすると。

案の定、周りがザワザワし始めた。つたく、一人称が俺でなにがわりい！

「ちよっ・・・美亜希さん！なんてこと・・・」
「センコは黙ってる」

でなきゃガツンと飛ばしてやるぞ？

先生をギロリと睨むと、なぜかおとなしくなる先生。
へえ。この先生、おとなしいじゃん。ラッキー！サボれるし。

一応、自己紹介。

俺、五十嵐美亜希は問題児として全国の高校の先生に知られている名前だ。

転校なんて口実。実は学校から追い払われただけ。ていうか高校3

年生で転校するヤツも少ないだろう。

もしかしたら気がついてる生徒もいるかもしれない。

とにかく犬のように　まるで、狂った犬を飼い主が追い払うように追い出された。

別に悲しいだなんて思ったことなんかない。どうせ俺は一匹狼だ。

怖がられるしか才能が無い。本当の自分を曝け出しても、きっと好いてはくれないのだから。同じこと。

それに、嘘の自分だったら傷つかなくてもすむ。

本当の自分が嫌われるより、嘘の自分が嫌われたほうがいい　。

それでは早速。

「センコ、さぼっていいすか？」

「ちよっ・・・美亜希さん！そういうの、教師にいうことじゃありませんっ！」

「あ？」

睨む。即終了！。

そりゃさ。

俺だってなんか女の子っぽくしてみたりとか、可愛くぶりっ子してみたりとかしたけど、性に合わない。

だって俺だもん。

俺は美少年と言われたことがあるが、美少女と言われたことがない。なんで生きてるのかとか、なんでここに居るのか、そういうのもわかんない。

流石に美少年と言われるのは腹が立ったから、髪の毛は胸辺りまである。

まあ この年になって美少年といわれたら最悪じゃないか。
一応というか・・・まあCは余裕にあるけど、胸あるし。

でも。傍から見て・・・ていうか、顔だけ見てみると、完全に男に
間違えられる。

ああ。

サボる〃屋上に来る
という俺の方程式。

それが崩れたことは、一回もない。
というか崩したくない。

ああ。

4年前に戻ってみたい。

中学3年生のあの時。
すべてが崩れ去ったのだ。

「ねえねー、美亜希っ！」
「なに？操子ちゃん」

あたしは、耳の横からくるくと巻いた茶色の髪の毛をいじりながら返事する。

そうすると操子は。

「ったくー。恋愛ゲームするのもいい加減にすればあ？」
といって、ショートボブの髪の毛を揺らした。

思いつきは、あたしの一言。

『ねえねえー。どっちがモテるか、勝負しなあい？』

それを言ったのが中3の7月くらいだから・・・半年くらいたったのかな？

その言葉に操子が賛成してから。

あたしたちはどんどん男の子と絡んでいった。

学年中の男の子から美亜希と呼び捨てにされ、好きでもない男の子とHもした。

もちろん、女の子の友達も操子だけになっていった。

『キシヨい女』 『何あれ？ぶりっ子系？』 『いい加減にしろ。マジム力つく』

そしてあたしの“男で遊ぶ女”っていう噂は、どんどん尾ひれをつけて広がっていく。

100股してる最低な女。

こんな最高な称号も貰った。

でも、男の子たちから嫌われることはなかった。

何故なら。男の子たちから見て、あたしの軀はとても魅力的に映るのだから。

中学生の割に丸い曲線を描くあたしの軀は遊びがいがあるというもののなのだろう。

あたしの奥にあるもの。

崇高な快感。

それを感じる度に、あたしの軀は狂っていき汚れていった。

たまに繁華街を歩くほど。

「みあちゃん、今夜一緒にあそばない？」

「いいわよ、理玖」

操子と話しこんでいる間に、あたしのお気に入り理玖と呼ばれた。気前よくオッケーし、操子を放って理玖とどこかにいく。

操子は大きいため息をついた。

「あんだ・・・ほんと、狂っちゃうよ？」

操子は知っているのだ。男子に呼ばれない夜、美亜希は一人で、濡れているのだ。制服を着ながら。

「ごめん、待った？みあ」

「んーちよつとね」

くすりとわらう、あたし。

「んじゃ、いこうか」

あたし達が向かう先は、“ラブホ”。

年齢制限は全然厳しくないところが、近所にあるのだ。

「うつわ、こんなにキレイな部屋、あつたんだ」

「今日は結構奮発したんだぜ？何しろお前の誕生日だからな！」

ああ・・・そうだった。理玖はちゃんと覚えてくれてたんだ。

「で？この白いうなじを貪って？甘いキスをして？そして甘い蜜をくれるんだよね？」

「なっ・・・なに言ってるのよお、理玖っ・・・ああん！」

急にうなじをソロリと嘗められ、ぞくりとする。

ああ・・・そうか。こういう甘いところがあたしの好きなところなんだ。

「脱がさして・・・みあ」

「それは・・・駄目っ！ー！こらっ、言ってる端から！」

露になる、肌。

軀中を目で犯される。長いまつげに縁取られた目。それだけで、呼吸が荒くなる。

「はじめちゃうよ?」

そして、ひとつになる。

何もかもが幸せかと思った。だから。

「理玖。理玖の好きなタイプ、教えて?」

あたしの大好きな、理玖。

お願い、あたしのような人って言って。

「男の子らしい人。でも遊んであげたら女の子っていうか嬌声が可愛い子。」

ギャップがある子がいい・・・俺、そういう人、かなり萌えるっていうか。

なんていうか 彼女にしたいかも、そういう女」

なん・・・!!

じゃあ、なんであたしなんかと相手してたの??

いきそうになってた軀、急にしゅんとする。

なんで、甘い声で囁いてたりしたの・・・??

「・・・ごめん理玖」

「どーした、みあっ・・・！」

あたしが四つん這いの格好だったからだろう。

涙を流していたことに気づかず、吃驚する、理玖。

「あたし、高校受験する。おんなじ高校になんか、行かないから。」

理玖と、同じ高校になんか、行かないんだから！」

片思いだと知った今、一緒の高校だったら余計辛くなるだけ。
それならば。

「ごめんね、理玖。二度と会わないと思うけど、また縁があったら。」

ふっと笑う。あたしが変わる、合図。

「また、縁があったら遊ぼうね」

また、縁があれば。

そして、ここに、俺　あたしがいる。

汚れて、すぐきたない軀。

なんてバカなこと、しちゃったんだろうって。

別に、今は理玖のことが好きってわけじゃないんだけど、・・・なんていうかな・・・。

そう　これは、仕返し。

あたしで遊んだくせに、心は見向きもしていなかった。そんな理玖に、仕返し。

「・・・あれ？みあ？」

くるり。振り返ると、爽やかな笑顔が待っていた。

どこか懐かしい、この顔。誰だっけ。

「俺に、何か用？」

「懐かしいな。二度と、会えないと思っていたのに」

何、これ。あたしのこと、知ってるようないい様じゃない。

・・・！！！！！！

「理玖・・・?!」
また、新しい時刻^{とき}が刻まれ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6176g/>

おれさまみあきさま！

2010年12月14日18時41分発行